

山口県埋蔵文化財調査報告 第181集

だん が はら
旦ヶ原遺跡

— 平成7年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告 —

1996

財団法人 山口県教育財団
山口県教育委員会



且ヶ原遺跡を上空から見る

序

山口県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、私たちの郷土山口を築いてきた先人の足跡を今に伝える歴史的資産－遺跡－を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すべく、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成7年度は、厚狹郡楠町大字東吉部に所在する且ヶ原遺跡の発掘調査を実施し、室町時代に営まれた集落跡を発見するとともに、当時の人びとの生活文化の実態を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめた記録であり、広く文化財への認識や理解のため、また、学術研究の資料として活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たって御協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人山口県教育財団 理事長 小河 啓祐
山口県教育委員会 教育長 小河 啓祐

例 言

1. 本書は、県営ほ場整備事業に先立って平成7年度に実施した旦ヶ原遺跡(山口県厚狭郡楠町大字東吉部)の発掘調査概要報告書である。
2. 本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と、文化庁国庫補助を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果をあわせて報告するものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会(山口県埋蔵文化財センター)

調査担当 財団法人山口県教育財団事務局指導主事 花岡 隆義

山本 義信

山口県埋蔵文化財センター文化財専門員 岩崎 仁志

4. 調査にあたっては、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、楠町農林課、楠町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
5. 本書の第1図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「湯ノ口」を使用した。第2図は下関土地改良事務所提供のものである。
6. 本書に使用した方位は、国土座標(第3座標系)で示し、標高は海拔標高である。
7. 出土遺物のうち石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門研究員 亀谷敦氏に依頼した。なお石質鑑定は表面観察によるものである。
8. 本書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式による。
農林省農林水産技術会議事務局(監修)「新版標準土色帳」
9. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
10. 土器実測図について、断面黒塗は須恵器、網掛けは陶器、白塗は土師器・土師質土器・瓦質土器を表す。
11. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。
SB:建物跡 SK:土坑 SP:柱穴 SX:不明遺構
12. 本書の作成・執筆は、花岡・山本・岩崎が分担作成し、岩崎が編集した。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	遺 構	9
	(1)掘立柱建物跡	
	(2)土坑	
	(3)溝状遺構	
	(4)その他の遺構	
IV	遺 物	17
V	ま と め	20

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	…… 1
第2図	調査区設定図	…… 5・6
第3図	遺構配置図	…… 7・8
第4図	SB01実測図	…… 9
第5図	SB02実測図	……10
第6図	SB03・04・05実測図	……12
第7図	SB06・07実測図	……13
第8図	SK15実測図	……14
第9図	SK実測図	……15
第10図	SD実測図	……16
第11図	SX01実測図	……17
第12図	SK15出土遺物実測図	……18
第13図	SK・SP出土遺物実測図	……19
第14図	包含層出土遺物実測図	……19

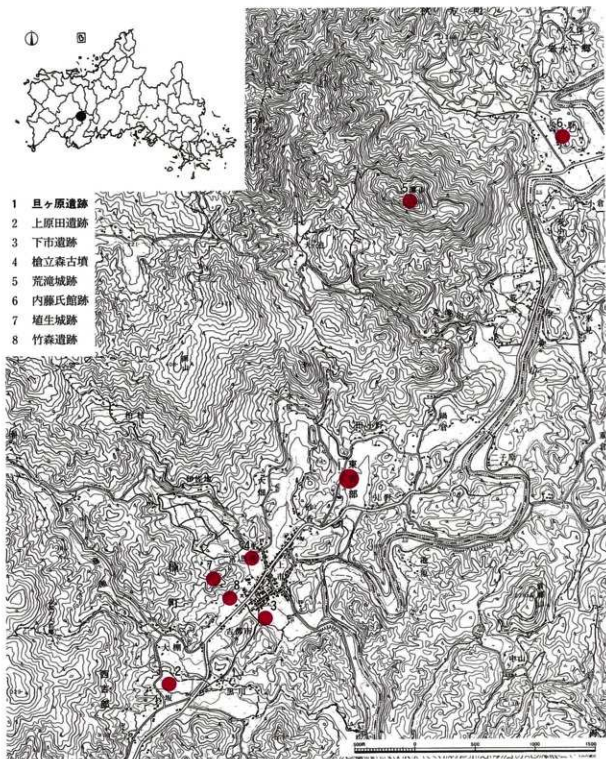
図 版 目 次

図版1	遺跡を上空より見る(南から)	遺跡を上空より見る(東から)		
図版2	遺跡を上空より見る(西から)	調査区全景(西から)		
図版3	SB01 (西から)	SB02 (西から)		
図版4	SB03・04・05・07 (西から)	SB06 (西から)		
図版5	SK15土器出土状況①②③④	漆器出土状況		
図版6	SK01土層断面	SK01・02、15、17、07、03	SP08土器出土状況	SX01
図版7	出土遺物①			
図版8	出土遺物②			
図版9	出土遺物③			

I 遺跡の位置と環境

厚狹郡楠町大字東吉部に位置する且ヶ原遺跡は、中世(室町時代)の集落跡である。

楠町は、山口県南西部の厚東川と有帆川の中流域に位置し、北東から南西に細長く広がる。東に宇部市、西に山陽町、南に小野田市、北に美祢市・秋芳町と隣接し、宇部小野田広域市町村圏に属する。南部の船木地方は、古来、東西陸上交通の要地であり、現在も国道2号や山陽新幹線の通過地となっている。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

現在の楠町は、1955(昭和30)年に、船木町・万倉村・吉部村が合併して生まれたものであるが、東吉部はその吉部村の北東部に当たる。「木部(きべ)」とは、山林の仕事に従事した部民のことで、その名に由来する地名は、楠町の吉部を始め、むつみ村の吉部、萩市の木部、柳井市伊陸の木部、防府市牟礼の木部など、山口県内にも各地で見受けられる。その地名の示すとおり、東吉部は、山間部があり、特に西側には美祢市との境にある日の岳(標高458m)を最高峰に、荒滝山・岡山などの山々が連なる日の岳山地が迫る。ただ、東側を流れる厚東川沿いに平坦な地があり、吉部盆地を形作っており、この限られた地域で人々は生活を営んできた。

昨年度調査された上原田遺跡では、竪穴住居をはじめとする縄文時代の遺構が確認されているものの、続く弥生・古墳時代の人々の生活の営みを明らかにする遺跡は少ない。わずかに植立森古墳が6世紀後半から7世紀前半の古墳であることが明らかになっている。しかし、植立森古墳の盛土の中から弥生前期の土器片が出土したことや、未確認ではあるが、かつて弥生土器などが出土したといわれる竹森遺跡も知られていることから、付近には弥生時代の集落跡が存在する可能性はある。

山間部ではありながら吉部は交通上比較的便利な場所であったため、古くから、厚東川上流の秋芳町の地域と、南部の船木地方を結ぶ南北の交通路、さらに伊佐地域と小郡地域を結ぶ東西の交通路の要所とされてきた。中世に至り、この地方は厚東氏、内藤氏と相次いで治められることとなる。各地に残る社寺や伝承には両氏に縁のあるものが多い。

厚東氏三代武通は、堂が原山に吉部寺を建てたといわれ、その頂上には堂塔の跡がたくさん残っている、と「風土注進案」にも書かれている。また、1261(弘長元)年、厚東氏九代武能の子の武村が豊前国の宇佐八幡宮を勧請し社殿を創建した寺尾八幡宮(現 吉部八幡宮)は、長く人々の信仰を集めてきた。

1358(正平13)年に滅んだ厚東氏に代わり、この地は長門守護代内藤氏により治められる。内藤氏二十代隆春の城として有名な荒滝城は、荒滝山上(標高456m)に築かれた山城である。その築城の時代は不明だが、隆春が内藤氏の家督を認められた1557(弘治3)年から関ヶ原の戦の後の「後兩國御打入」まで荒滝城にいたといわれる。また、荒滝山の東麓の今小野の地に居館を構えたと伝えられ、土居・上屋敷・下屋敷・堀・武者屯などの地名やかど名が今もその名残をとどめている。さらに吉部市に近い小高い丘陵上には、内藤氏の重臣植生氏のものといえられる山城が所在する。一昨年度に調査の行われた下市遺跡で確認された屋敷を含む建物群は、まさにこの時代の内藤氏の関係者、特に植生氏及びその家臣などの住居であったと考えられる。

江戸時代の記録には、山陽道の要地船木市から秋吉村(現美祢郡秋芳町)を経て萩に至る往還に沿って吉部市が開かれたことが残されており、慶長15(1610)年の検地帳には「吉部郷のうち市屋敷41、石高22石余」と記されている。市では小野、万倉、美祢の辺りから各地の物産を持ち寄った商人や、それを買い求める人々とで賑わいを続けたのである。

参考文献 楠町 【楠町の歴史】 大村印刷 1980

【わが町の歴史アルバム】 瞬報社写真印刷株式会社 1985

山口県教育会 【山口県百科事典】 大和書房 1982

竹内理三 【山口県地名大事典】 角川書店 1988

II 調査の経緯と概要

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存が難しい遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施してきた。楠町東吉部に位置する且ヶ原遺跡も県営ほ場整備事業楠北地区の対象地となったため、事前の発掘調査を実施することとなった。調査は財団法人山口県教育財団が県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて、これら両機関が共同で行うこととなった。

平成7年4月24日、現地における地権者等関係諸機関との打ち合わせを行った後、5月10日から発掘調査を開始した。まずはじめに、地層及び遺構の分布を把握するため、事前調査(平成5年度分布調査)の資料をもとに対象地区に12本のトレンチ(第2図)を設定し人力で掘り下げた。この結果、当初予定していた調査範囲よりも西側に多くの遺構が認められたため若干の調査区変更を行った。調査面積は約2500㎡。また、調査区の西端と東端ではおよそ3m近くもの高低差があるため、4面ある水田区画の各段の斜面高位側は削平が著しく、遺構が残っていないことが分かった。基本的な層序は、耕作土→盤土→黄褐色土の地山で、この地山を掘り込む状態で遺構が検出された。なお、調査区の北東端には地山の傾斜に沿って褐色土の遺物包含層が認められ、その下には人頭大の礫の堆積が見られた。

5月16日、重機による表土除去が開始され、その後、人力による精査を行い各遺構を検出した。本年は晴天に恵まれ、すぐに遺構面が乾いてしまうため、水をまいてはシートで覆い、そのシートをめくっては検出作業を続けるということを繰り返した。その苦労の結果、調査区の西側には数棟の掘立柱建物がかくつか重なる形で確認された。また、土坑数基、溝状遺構数条、ため池の跡かと思われる大型の遺構も確認された。遺構検出後、調査区全域の平板測量を行い、遺構配置図を作成、次からの遺構掘り込みに備えた。

6月13日、遺構掘り込みを開始した。尾根上に位置する調査区であるため水の確保に苦労した。およそ10m下を流れる川からポンプで数m上まで汲み上げてからバケツリ



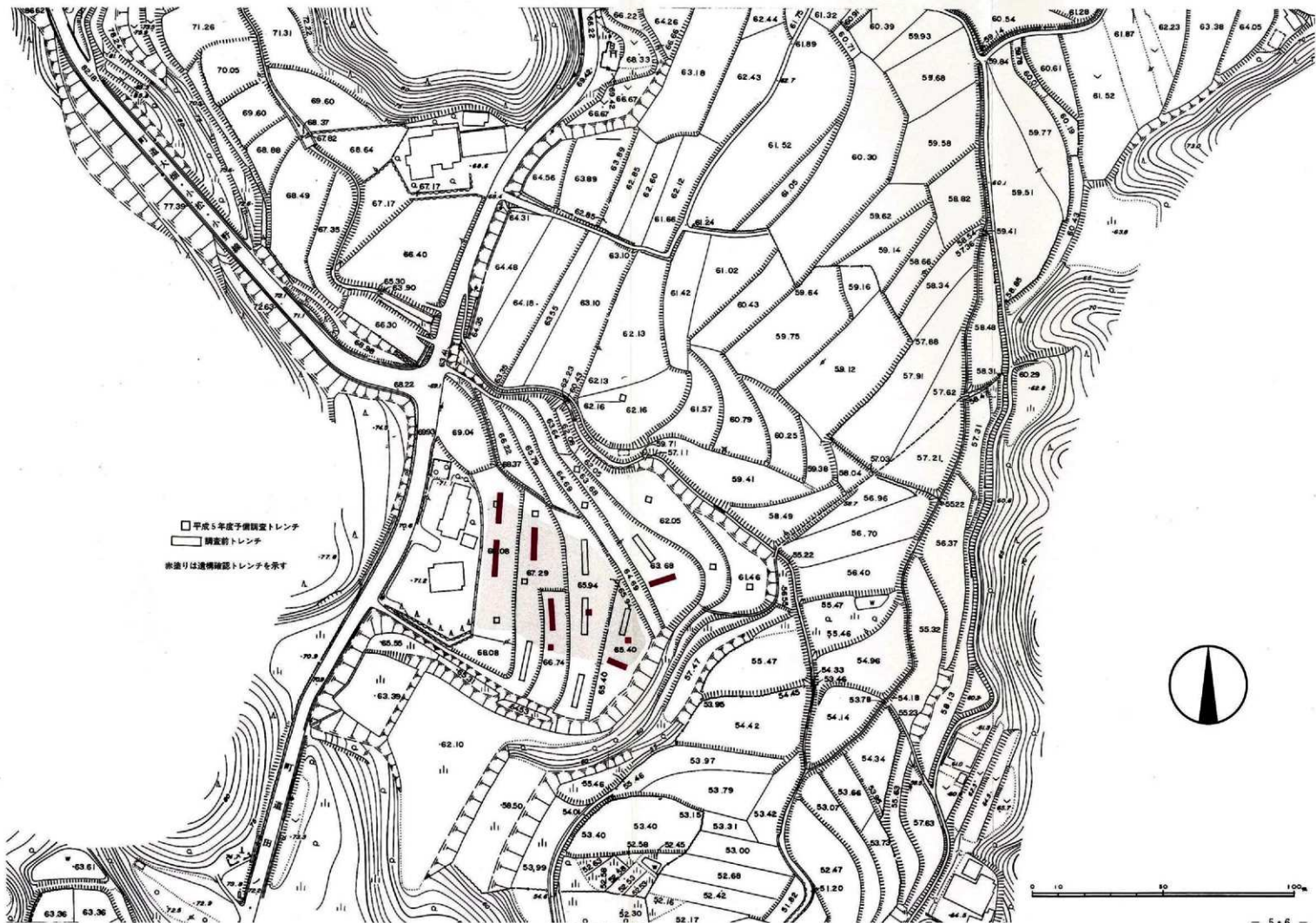
レーで調査区横の水溜に運んでいった。高齢の作業員にとっては過酷な作業であったが、誰一人音を立てることなく黙々と作業を続けた。その努力に支えられて掘り込みは続けられたが、作業員の期待とは裏腹に、遺構の残りは悪く出土する遺物の数も少なかった。その中で特筆すべきものとして、SK15がある。この土坑からは完形の土師皿を含め、合わせて十数枚の皿・杯や漆器の皿などが出土し、作業員の間にも笑みがこぼれた。また、柱穴の集中している場所には多くの掘立柱建物が復元でき、柱穴全てに石が詰め込まれているものも確認された。

掘り込みの完了したそれぞれの遺構は、随時、写真撮影を行い実測を進めていった。6月29日、遺跡全域の空中写真を撮影した後、さらに調査区全域の遺構の実測を進めていった。

7月8日、発掘調査の成果を地元の人々に知らせるため現地説明会を開催した。たくさんの熱心な見学者の参加を得て、当時の人々の生活の一端を垣間見もらった。

7月11日、およそ2ヶ月に及ぶ現地におけるすべての調査を終了した。その後、県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施して、この報告書を刊行した。





III 遺 構

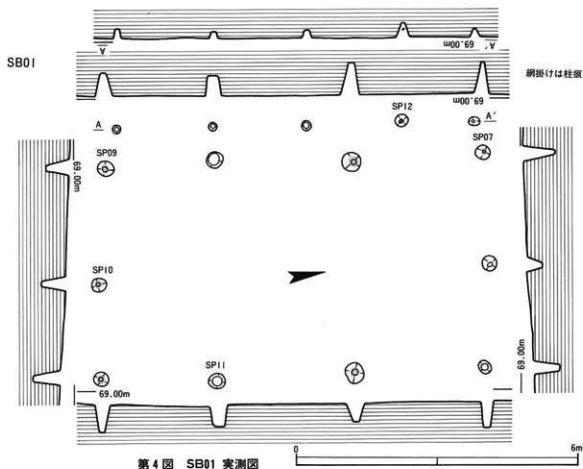
今回の発掘調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡7棟、土坑19基、溝状遺構9条、柱穴約550個の他、不明遺構1基がある。各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており遺存状況は全般的によくない。

(1) 掘立柱建物跡

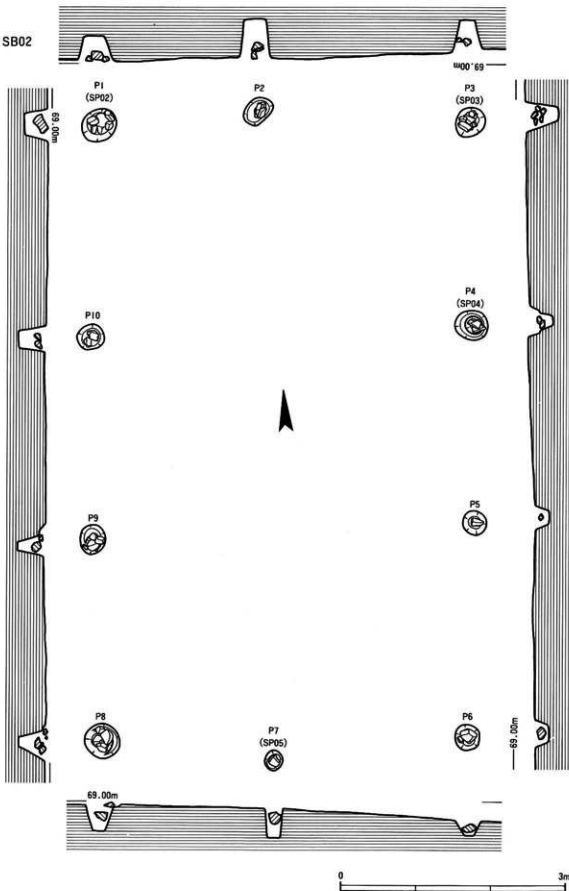
調査区西側の地勢の高い場所、特に北西隅及び中央部南側には掘立柱建物を構成すると思われる多数の柱穴が検出され、7棟の掘立柱建物が復元された。これらは細長く伸びた尾根上の比較的平坦な場所を選んで建てられたものと考えられる。実際、いくつかの建物は重なり合って検出され、何度も建て直しが行われたことをうかがわせる。柱穴の埋土、配置、出土遺物などを手がかりに時代決定を行い、室町時代に比定することができた。

SB01(第4図 図版3)

調査区内の最も地勢の高い北西部に位置し、SB02と一部重なっている。2間×3間の建物と考えられ、棟方向はN7°W、桁行長8.2m、梁行長4.4m。柱穴間の平均は桁行方向2.6m、梁行方向2.2m。柱穴の規模は直径25～40cm、深さ40～80cm、また、6個の柱穴においては、褐色の柱穴埋土の中にくい黄褐色土の柱痕が確認され、その規模は直径15～25cmである。なお、建物の西側にはほぼ棟に平行に小さな柱穴が並んでおり、庇の可能性も考えられる。SP07・SP09・SP10・SP11から土師器片、SP12から瓦質土器片、SP15から茶釜胴部(24)が出土。



SB02



第 5 图 SB02 实测图



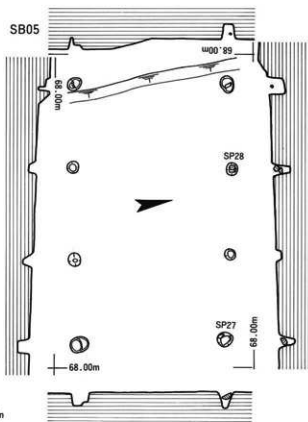
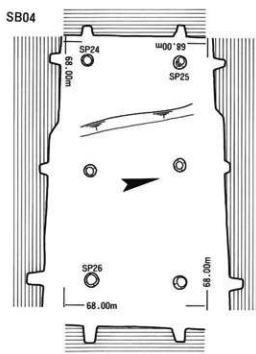
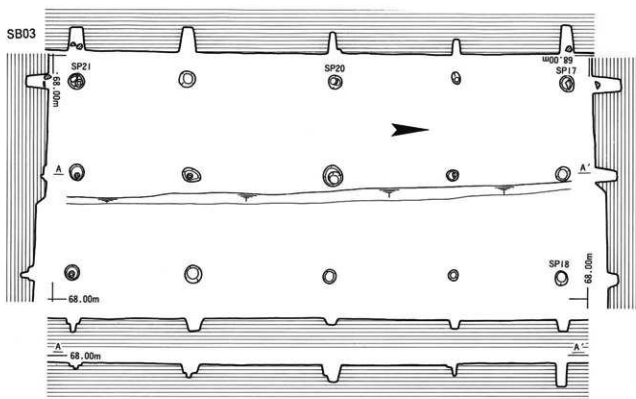
SB02 柱穴内石出土状況

SB02(第5図 図版3)

桁行長8.1m、梁行長4.8m、2間×3間の建物であり、SB01とほぼ同一の規模である。棟方向はN 3° E。10個の柱穴で構成され、柱穴の規模は直径25(P7)～50(P8)cm、深さ20(P5)～50(P2)cmであり、それら全ての柱穴埋土上位からは石が検出されており詰石と考えられる。柱穴間の距離は、梁方向にP1-P2間 2.1m、P2-P3間 2.7m、桁方向にP1-P10間 2.8m、P10-P9間 2.7m、P9-P8間 2.6mであり、対応する柱穴間もほぼ等しい。P1(SP02)・P3(SP03)・P4(SP04)・P7(SP05)より土師器片が出土。

SB03・04・05(第6図 図版4)

調査区の中央部南側に位置する掘立柱建物群。SK10・11・12・13・14・15などの土坑と隣接する。建物の棟方向から、SB04・05は同時期のものであり、その時期に前後してSB03が建てられたものと考えられる。



第6图 SB03・04・05 实测图

SB03は桁行長 10.5m、梁行長 4.1m、柱穴数15個の2間×4間の総柱建物である。棟方向はほぼ南北であり、今回の調査では最大の掘立柱建物である。柱穴間の距離は南西隅柱(SP21)から桁方向に2.4m・3.1m・2.6m・2.4m、梁方向に2.0m・2.1mであり、1間×2間の建物と2間×2間の建物に分かれる可能性もある。柱穴の規模は直径20～40cm、深さ19～60cm。SP17・18・20・21・22より土師器片が出土。

SB04はSB03と一部重なり合う1間×2間の建物である。棟方向はN78° W。桁行長4.6m、梁行長1.9m。柱穴の規模は直径25～30cm、深さ20～38cm。遺物はSP24より土師器杯(19)、SP25・26から土師器片が出土。

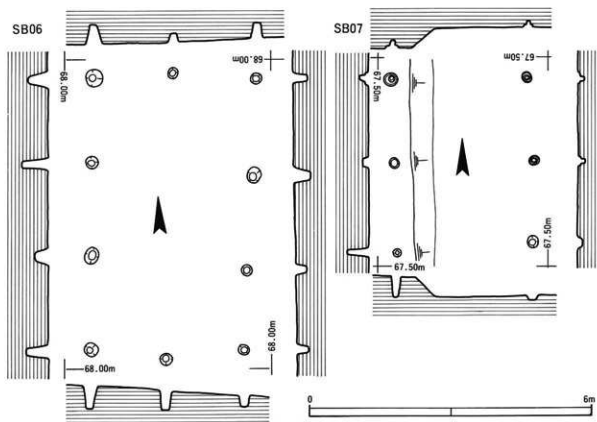
SB05は、棟方向N80° Wで、SB04とほぼ向きを同じくする1間×3間の建物である。SB04と同様にSB03と一部重なり合っている。桁行長は5.7m、梁行長は3.2mであり、桁方向の柱間の平均は1.9m。柱穴の規模は直径22～36cm、深さ18～32cm。SP27・28から土師器片が出土。

SB06(第7図 図版4)

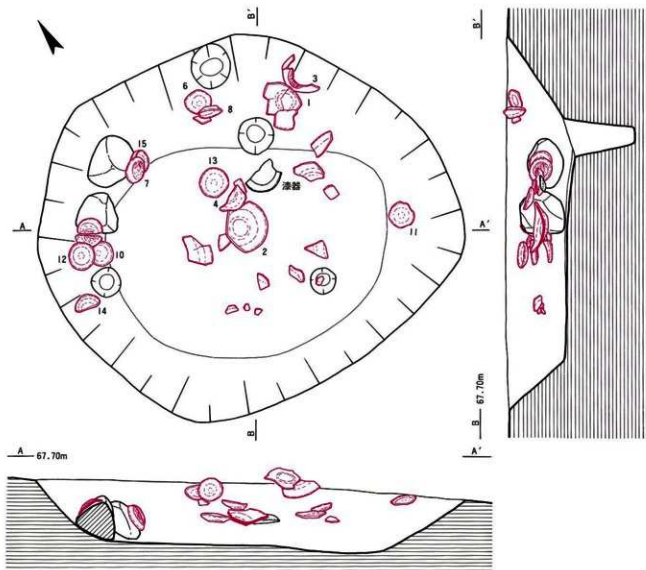
調査区のほぼ中央に位置する2間×3間の掘立柱建物。棟方向はN5° E。桁行長5.8m、梁行長3.3mで、柱穴間の距離は南西隅の柱穴から桁行方向に2.0m・2.0m・1.8m、梁行方向に1.6m・1.7mであり、対応する柱穴間もほぼ等しい。柱穴の規模は直径20～38cm、深さ24～50cm。柱穴からの遺物の出土はなかった。

SB07(第7図 図版4)

今回の調査では最も東側の地勢の低い場所に建てられた1間×2間の掘立柱建物であり、SB05のすぐ東側に位置する。棟方向はほぼ南北で、桁行長3.6m、梁行長2.8m。柱穴の規模は直径18～28cm、深



第7図 SB06・07 実測図



第 8 図 SK15 実測図

さ10～50cm。柱穴から遺物は出土しなかった。

(2) 土 坑

今回の調査では多数の土坑が検出されたが、その平面形から円形・長円形・隅丸長方形・不整形に分かれる。不整形の土坑は調査区の東側に数多く確認されたが、遺物を全く含まないことや人為的に掘り込まれた様子がないことなどから風倒木の跡などと考えられる。

SK15(第8図 図版5・6)

調査区中央部、SB03の北側に位置する。平面形は長軸115cm、短軸100cmの長円形。深さは15cm。埋土はふい黄褐色土の単層であり、土師器杯5個体(1～5)、皿12個体(6～17)、漆器皿1個体がまとまって出土した。これらは基本的には上向きであるが、合わせ口にして立てられた皿や、重ねられた杯などもあり、漆器は伏せられていた。おそらく何らかの祭祀が行われ、置き捨てられたものと考えられる。埋土上位より瓦質土器鍋片(18)が出土。

SK01・02(第9図 図版6)

調査区の北西部に位置する。SK01は、直径140cmのほぼ円形の平面形を持ち、深さ15cmを測る。埋土は極暗褐色土の単一層であり、あとからSK02が掘り込まれている。埋土中から瓦質土器鍋片(22)が出土。土坑内面は焼け締まりが認められた。SK02の平面形は、長軸70cm、短軸60cmの長円形をなし、深さ20cmを測る。埋土にはふい黄褐色土の単層であり、出土遺物はなかった。

SK07(第9図 図版6)

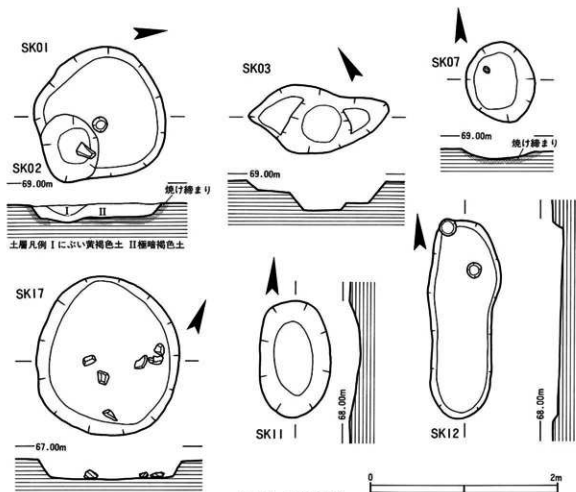
調査区の南西部に位置する長軸85cm、短軸75cmの長円形の平面形を持つ小土坑。深さは8cm。出土遺物はなかったが、SK01と同様に内面は焼け締まり、暗褐色の埋土には多量の炭を含む。

(3) 溝状遺構

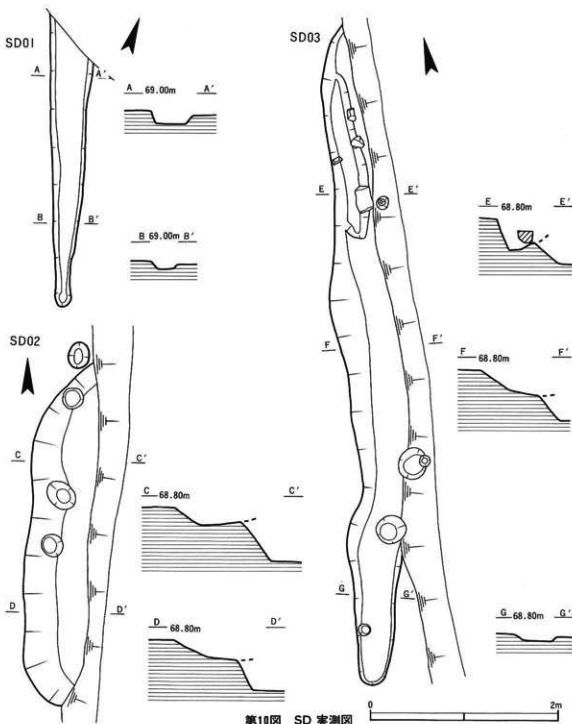
今回の調査では9条の溝状遺構を検出した。いずれも上面の削平が激しく、SD05を除いては数mを確認したにとどまった。なお、SD05は畦畔に沿って直線的に延びていることから、現状の水田に関わるものと考えられる。ここでは、SD01・02・03について述べる。

SD01・02・03(第10図)

SD01は調査区外に延びるが、検出された長さは2.8m、幅40cm、深さ15cm。SD02・03は共に東側を削平されているため幅は不明であるが、それぞれの長さ・深さは、SD02は3.6m・20cm、SD03は7.6m・35cm。出土遺物は、SD01から土師器片・瓦質土器鍋片、SD02から土師器片、SD03から土師器片・瓦



第9図 SK 実測図

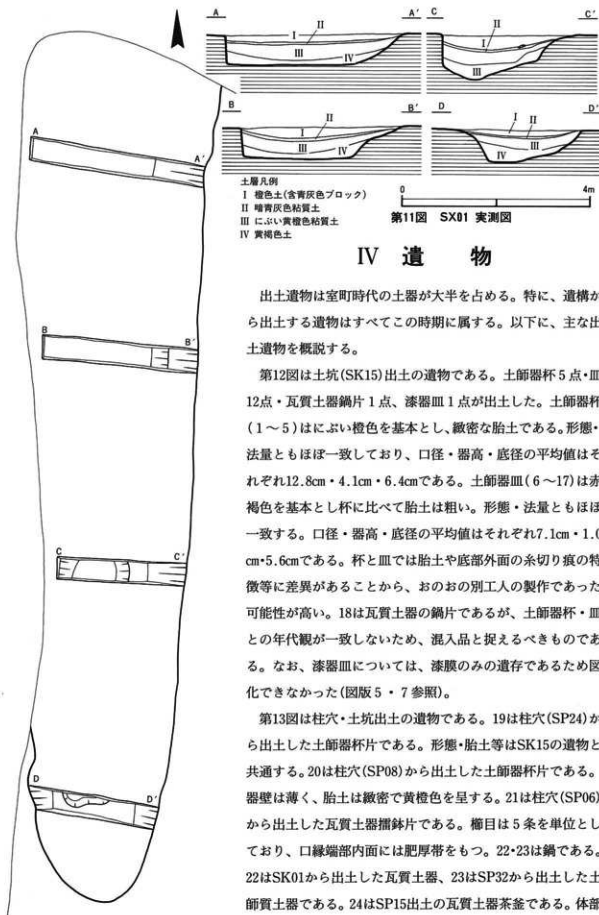


第10図 SD 実測図

質土器鍋片・スラグ。これらの出土遺物及び埋土から、SB01・02の東側に位置するこれらの溝状遺構は同一の溝と考えられ、建物に関わる施設の可能性がある。その場合の総延長は約30mに及ぶ。

(4) その他の遺構

調査区の北西端に位置するSX01(第11図 図版6)は、南北に約18.4m、東西の最も幅の広いところで約4mを測る。トレンチ調査により最深部は96cm、埋土は4層に分かれることを確認した。なお、底部では湧水がみられ、地区の古老の話によれば、現状の水田が開発される以前には、この場所のため池があったということである。



IV 遺物

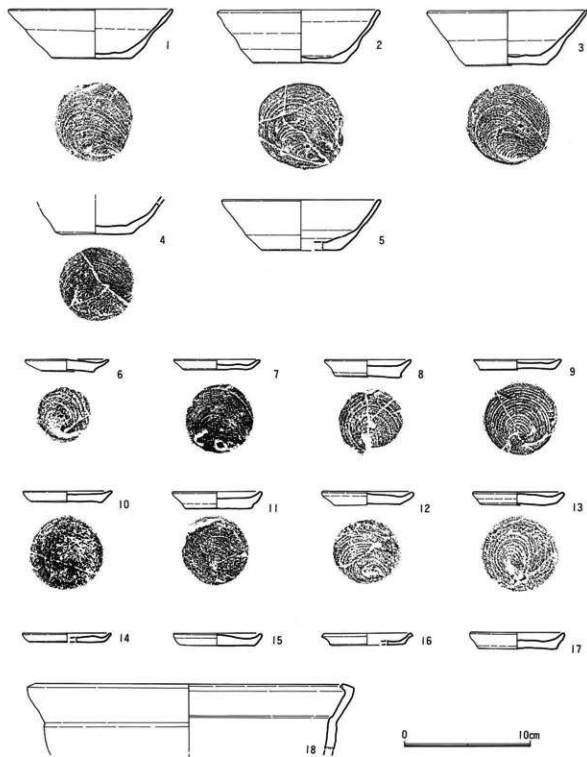
出土遺物は室町時代の土器が大半を占める。特に、遺構から出土する遺物はすべてこの時期に属する。以下に、主な出土遺物を概説する。

第12図は土坑(SK15)出土の遺物である。土師器杯5点・皿12点・瓦質土器鍋片1点、漆器皿1点が出土した。土師器杯(1~5)はにぶい橙色を基本とし、緻密な胎土である。形態・法量ともほぼ一致しており、口径・器高・底径の平均値はそれぞれ12.8cm・4.1cm・6.4cmである。土師器皿(6~17)は赤褐色を基本とし杯に比べて胎土は粗い。形態・法量ともほぼ一致する。口径・器高・底径の平均値はそれぞれ7.1cm・1.0cm・5.6cmである。杯と皿では胎土や底部外面の糸切り痕の特徴等に差異があることから、おのおの別工人の製作であった可能性が高い。18は瓦質土器の鍋片であるが、土師器杯・皿との年代観が一致しないため、混入品と捉えるべきものである。なお、漆器皿については、漆膜のみの遺存であるため図化できなかった(図版5・7参照)。

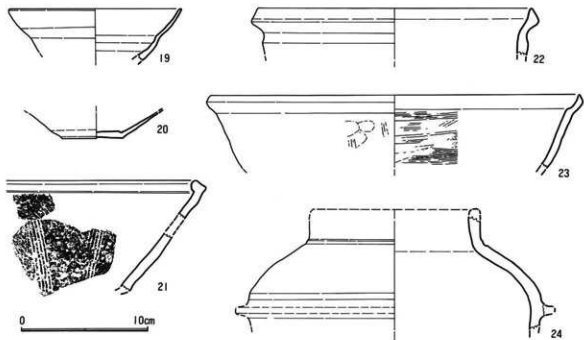
第13図は柱穴・土坑出土の遺物である。19は柱穴(SP24)から出土した土師器杯片である。形態・胎土等はSK15の遺物と共通する。20は柱穴(SP08)から出土した土師器杯片である。器壁は薄く、胎土は緻密で黄褐色を呈する。21は柱穴(SP06)から出土した瓦質土器搗鉢片である。櫛目は5条を単位としており、口縁端部内面には肥厚帯をもつ。22・23は鍋である。22はSK01から出土した瓦質土器、23はSP32から出土した土師質土器である。24はSP15出土の瓦質土器茶釜である。体部最大径部分にある鐮を欠失するが、破断面に煤が付着してお

り、破損後も使用したと考えられる。また、SP29から政和通寶が出土(図版7参照)。

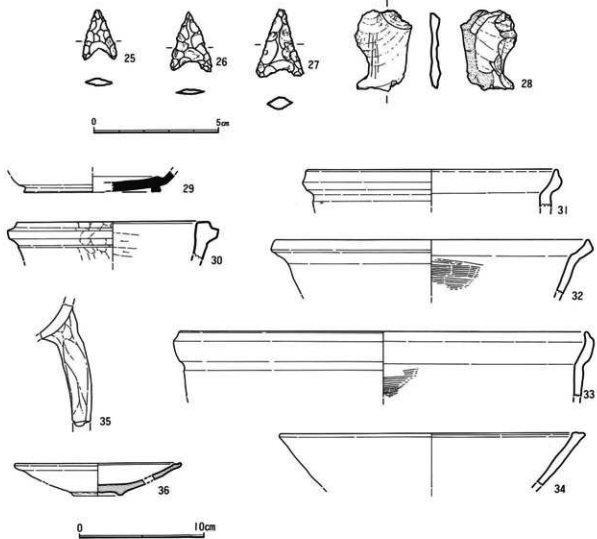
第14図は遺物包含層から出土した遺物である。25~27は安山岩製の打製石鏃である。28は黒曜石の剝片であり、片面に自然面を残す。29は奈良時代に属すると考えられる須恵器杯底部である。焼成不良のため色調は灰白色を呈する。30は滑石製の石鍋である。全面に工具による削り痕が残る。31~34は瓦質土器鍋である。35は瓦質土器足鍋脚であり、指頭痕および掌痕を残す。36は陶器皿である。高台を除き、内外に灰釉をかける。見込には砂目の痕跡が残る。17世紀前半の肥前陶器と考えられる。



第12図 SK15出土遺物実測図



第13图 SK・SP出土遺物実測図



第14图 包含層出土遺物実測図

V ま と め

且ヶ原遺跡は、山口県厚狭郡楠町大字東吉部に所在する中世集落遺跡である。調査区内からは縄文ないし弥生時代の打製石鏃を最古とし、江戸時代の陶器に至る各時代の遺物が出土したが、発見された遺構の大半は室町時代に属するものであった。遺構は掘立柱建物を主体とし、土坑・溝状遺構等が付随する、典型的な中世集落の在り方を示す。

且ヶ原遺跡は吉部盆地の北東部に連なる谷筋に位置する。遺跡はこの谷筋に面する台地上に立地する。試掘調査の結果、遺跡の立地する台地上のみに安定した地盤が存在しており、居住地としてこの高燥な台地が選ばれたのは当然であろう。これに対し、谷筋の低地は湧水点の高い湿地状の土地であることが確認されており、決して条件に恵まれないものの、耕地として利用されたと考えられる。且ヶ原遺跡はこの谷筋を生産基盤とした人々の集落であるから、谷筋の低湿地という地理的条件に人々の生活はおのずから規定されたであろう。

且ヶ原遺跡を考えるためには、吉部盆地にある既調査の下市遺跡・上原田遺跡との比較検討が必要であろう。下市遺跡は盆地のほぼ中央の山裾にある、平安時代後期(11世紀)から江戸時代初期(17世紀初頭)にかけての集落遺跡であり、武士居館と推定される地区を含んでいる。遺構に伴わない状態で、縄文時代以降の遺物を出土している。上原田遺跡は盆地南西部の広大な台地上にある、縄文時代晚期および室町時代(15～16世紀)の集落遺跡である。県内では数少ない縄文時代の住居跡が確認されて注目を浴びた。遺構に伴わない状態で、縄文時代早期にさかのぼる遺物を出土している。両遺跡とも、且ヶ原遺跡と同時期(15～16世紀)に集落が存在しており、格好の比較の対象である。

且ヶ原遺跡の特徴のひとつは、遺構密度が比較的低いことである。このため、掘立柱建物跡の抽出が容易であり、かえって多くの資料を得ることができた。掘立柱建物の規模で比較するなら、上原田遺跡が最も大型の建物をもっており、且ヶ原遺跡がこれに次ぐ。そしてこれらの建物は、下市遺跡の武士居館で復元される建物よりも大型である。この事実は、建物規模の大小が集落の立地条件や生産基盤の優劣を必ずしも反映しないことを示しており、注目に値する。

且ヶ原遺跡のもうひとつの特徴は、中世の陶磁器が全く出土しないことである。下市遺跡I地区(武士居館)と比較した場合、その差が際立っている。また、下市遺跡II地区および上原田遺跡からも少量ながら中世の陶磁器が出土している。したがって、陶磁器の保有状況は集落で生活する人々の経済力をよく反映していると考えることができそうである。

且ヶ原遺跡の集落は室町時代半ば(15世紀)に形成され、江戸時代(17世紀)には姿を消す。このことは、15世紀に谷筋の低湿地が耕地として開発され、17世紀に遺跡の立地する台地が耕地化して集落が移転したことを物語る。この耕地化の時期については江戸時代初期の肥前陶器がよく符合している。また、17世紀以後集落が廃絶する点については下市遺跡・上原田遺跡とも呼応する。山口県において、耕地開発が急激に進展するのは毛利氏の防長移封直後の時期であり、吉部盆地の遺跡断絶はまさにこの毛利氏の政策を反映していると考えられる。



遺跡を上空より見る（南から）



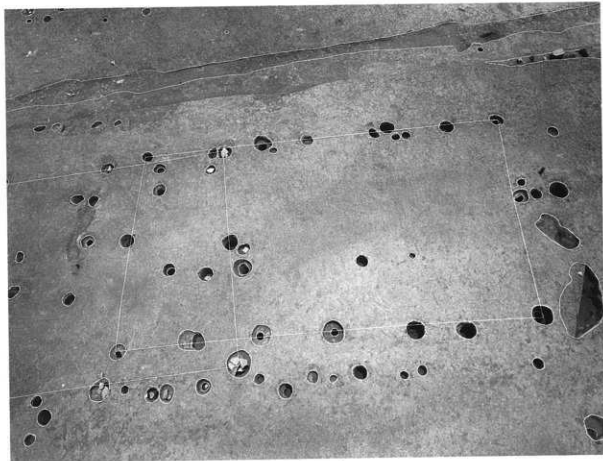
遺跡を上空より見る（東から）



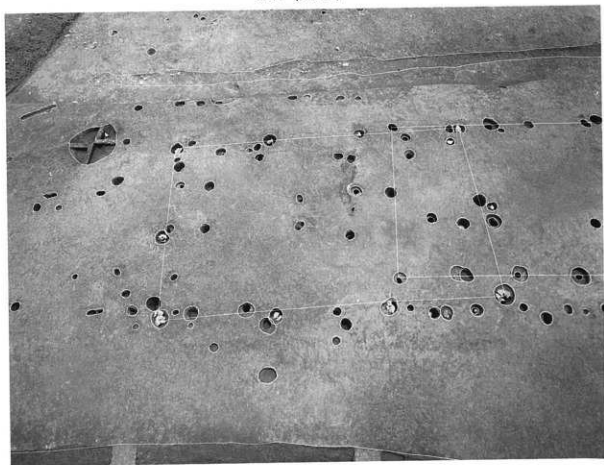
遺跡を上空より見る (西から)



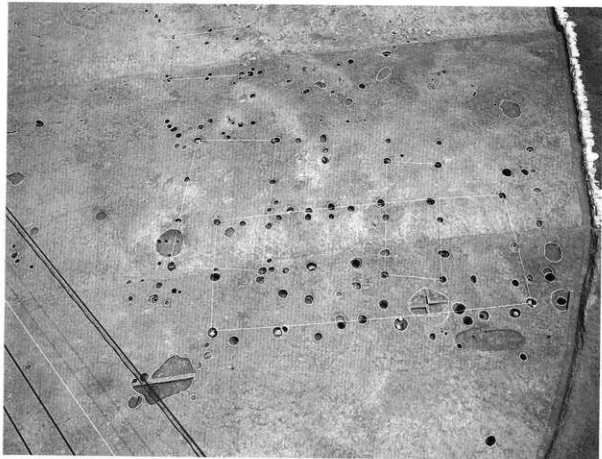
調査区全景 (西から)



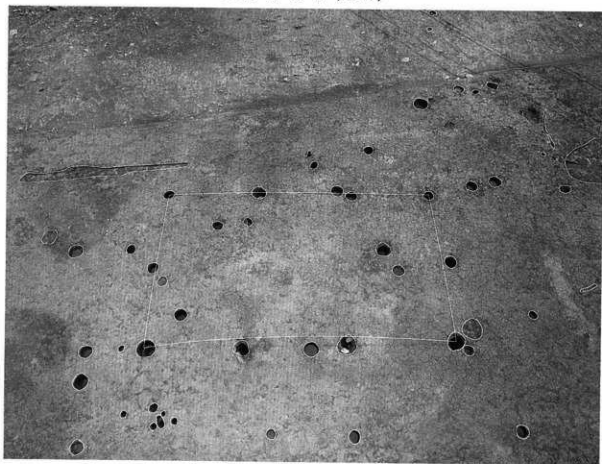
SB01 (西から)



SB02 (西から)



SB03・04・05・07 (西から)



SB06 (西から)



SK15土器出土状况①



SK15土器出土状况②



SK15土器出土状况③



SK15土器出土状况④



漆器出土状况

图版 6



SK01土層断面



SK01・02



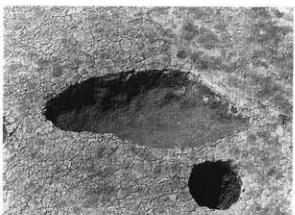
SK15



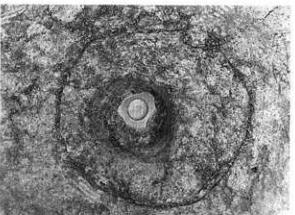
SK17



SK07



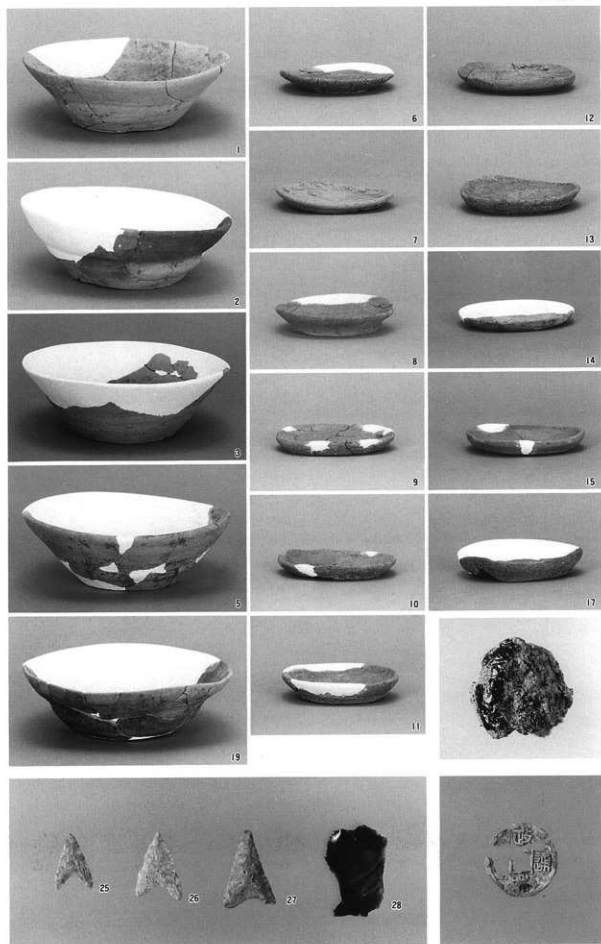
SK03



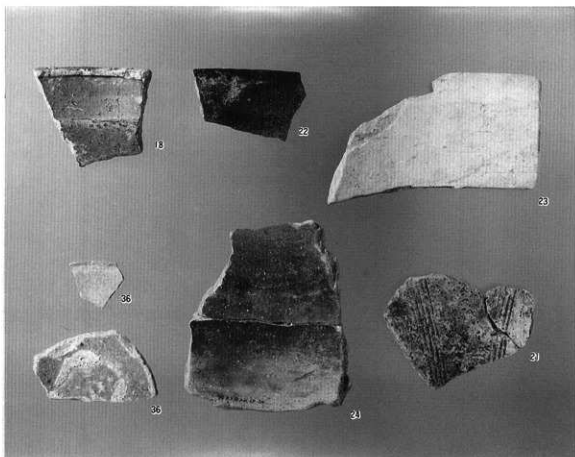
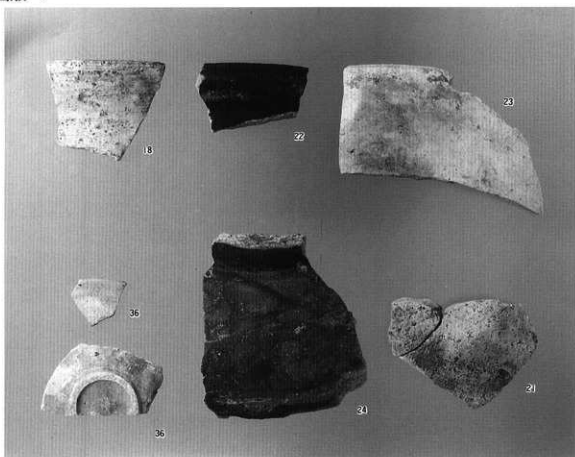
SP00土器出土状況



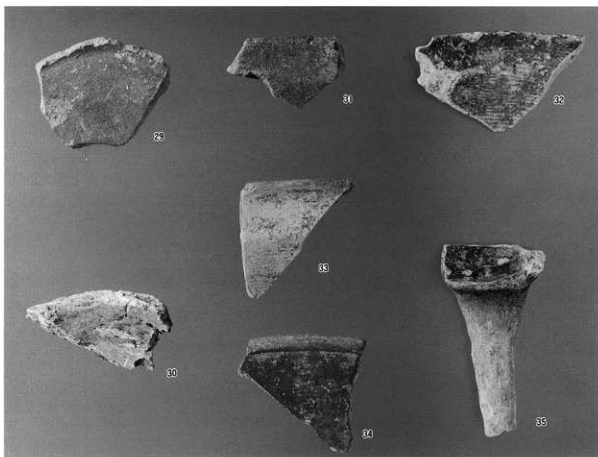
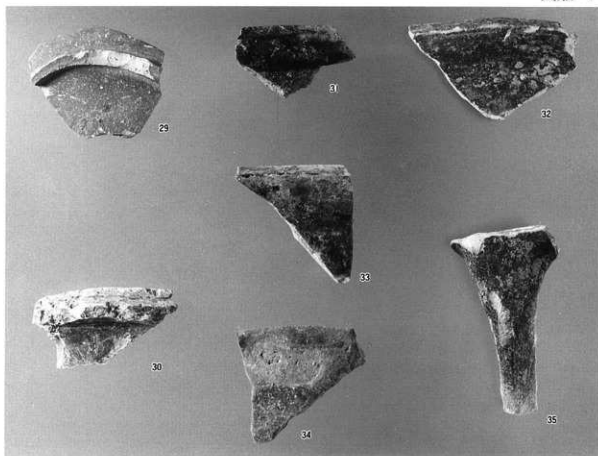
SX01



出土遺物①



出土遺物②



出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	だんがほらいせき
書名	且ヶ原遺跡
副書名	平成7年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第181集
編著者名	岩崎仁志 花岡隆義 山本義信
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753 山口県山口市春日町3-22 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1996年3月19日(平成8年3月19日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 * * *	東経 * * *	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
だんがほらいせき 且ヶ原遺跡	あきぐんくすのまちょう 厚狭郡楠町 大字東吉部	35421		34° 7'44"	131° 17'37"	19950424 ∫ 19950711	2,600	ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
且ヶ原遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡 7棟 柱穴 550個 土抗 19基 溝状遺構 9条	土師器、瓦質土器、陶器 須恵器、漆器、銅銭	中世(室町時代) の比較的短期間 に営まれた集落

山口県埋蔵文化財調査報告 第181集

旦ヶ原遺跡

—平成7年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1996年3月

編 集 財団法人 山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県埋蔵文化財センター

(山口市春日町3-22)

発 行 財団法人 山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県教育委員会

(山口市滝町1-1)

印 刷 大村印刷株式会社

